様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月　 ３ 日現在

機関番号：１７４０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２０６７９

研究課題名（和文）英語外部テストの妥当性・波及効果に関する研究

研究課題名（英文）A Study of Validity and Washback Effects of Granting Course Credit for Performance on English Proficiency Tests

研究代表者
島谷　浩（Shimatani, Hiroshi）

熊本大学・教育学部・教授

研究者番号：１０２５８３３７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　1,200,000円、（間接経費）　360,000円

研究成果の概要（和文）：英語外部テストを利用した単位認定で英語履修免除となった学生が，大学でどのように英語を学習し，単位認定制度をどう評価したかなど，外部テストによる単位認定の妥当性と波及効果を探った．アンケート結果から，77%の学生がその単位認定制度を評価していたが，自主的な英語学習を継続したのは半数ほどであった.単位認定に利用された外部テストは，間接テストであったが，直接テストで測定された英語表現能力と間接テストで測定された英語力の相関は非常に低い結果が報告された．英語表現能力向上を指導目標とする授業の単位を，間接的に表現能力を測定する外部テストで単位認定する制度の問題点が明らかとなった．

研究成果の概要（英文）：This study explores how university students study English independently after getting course credits for performance on English proficiency tests called gaibu test and how they evaluate the system of granting course credits. The results show that 77% of the students evaluated the system positively and 51% of students continued to study by themselves. Most of the English proficiency tests measure students' English ability indirectly. The test results of the participants in this study show a very low correlation between the scores measured by a direct test and the ones measured by indirect tests. These results suggest a flaw in the system of granting course credits using indirect tests only.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：教育評価・測定　外部テスト　単位認定　波及効果　妥当性

１．研究開始当初の背景

(1) 多くの高等教育機関において，外部テストとして英語能力テストが頻繁に利用されるようになった．外部テストとは，学校外のテスト専門機関によって作成されたテストであるが，「説明責任」が問われるにつれ，外部テストを利用した測定・評価が奨励されるようになってきた．

(2) 外部テストは，社会的評価がある程度認知されているためか，英語能力テストに対する妥当性，波及効果に関する研究は限定されている．特に，単位認定基準として外部テストを利用することの妥当性，波及効果に関する実証的研究はほとんど行われていなかった．

２．研究の目的

(1) 高等教育機関の単位認定に広く利用されるようになった外部テストについて，その妥当性と波及効果を質的研究と量的研究の両面から検証する．質的研究として，外部テストを利用した単位認定を受けて英語履修を免除された学生が，その後，どのように大学で英語の学習を行ったか，また，英語履修を免除された学生が，どのようにその単位認定制度を評価しているかなど，学生へのアンケート調査から，外部テストによる単位認定の妥当性と波及効果を探る．

(2) 単位認定等のために頻繁に利用されている外部テスト（たとえばTOEIC®テスト）のほとんどでは，「話す能力」や「書く能力」などの英語を使って表現する能力が間接的に測定されるだけで，直接測定されてはいない．英語を「書く能力」を直接測定するライティング・テストの大学生の受験データを，その外部テスト業者によるテストの採点，タスク中で用いられた語彙・文法などの文章作成スキルの評点，そのテストで求められたタスクに対する受験者の自己評価の観点から分析する．さらに，直接測定された大学生の表現能力と一般の外部テストで間接的に測定された語彙力，聴解力，読解力との相関関係を分析する．

３．研究の方法

(1) 英語外部テストによる単位認定の波及効果を探るために，実際に単位認定を受けて英語履修を免除された学生が，その後，どのように大学で英語の学びを継続したかなどを，卒業直前のアンケートにより調査する．大学の事務部の協力により，英語外部テストによる単位認定によって１年次・２年次の教養英語の履修が免除された学生のリストを取得し，それらの学生の卒業年度末に学生の自宅にアンケートの目的と質問用紙，回答用紙、返信用封筒などを郵送し，無記名で回収されたアンケートへの回答を分析する．

(2) 英語表現能力を測定するために利用された直接テストは，国際英検ジーテルプ(G-TELP)のライティング・テストで，1時間で，次の5つのタスクが測定される．Task 1）与えられたキーワードを少なくとも6語用いて，80語以上のパラグラフを書く[6分]．Task 2）与えられた状況で，100語以上の私的な手紙を書く[12分]．Task 3）与えられた状況で，100語以上の公的な手紙を書く[12分]．Task 4）グラフを見て，120語以上で，その内容を記述し意見を書く[14分]．Task 5）与えられたトピックについて，140語以上で論説文（エッセイ）を書く[16分]．

(3) 被験者は，熊本大学の理学部と医学部保健学科の2年生40名で，2年後期のCALLクラスの受講生である．熊本大学においては，

教養英語の必修単位数は学部によって異なるが，被験者の学部では 6 単位（1 年で 4 単位, 2 年で 2 単位）が必修であった．調査対象となった被験者にとっては，調査対象クラスが大学での最後の必修英語授業であった．被験者は，ライティング・テスト受験前に，間接テストとして広く利用されている TOEIC®テストの簡易版である TOEIC Bridge®テスト，熊大作成の語彙サイズ判定テストも受験しており， それらのテストで測定された被験者の英語力と G-TELP のライティング・テストで測定された英語表現能力が分析された．

４．研究成果

⑴外部テストによる単位認定に，認定を受けた学生のほとんどは肯定的であった．77%が「プラスであった」と回答した．単位認定が「マイナスであった」と回答した者は 9%であった（表 1）．英語を学習しなくなり英語力が伸びていないことに不満を持った学生は少数であった．

表 1 単位認定による影響

	影響	人数	%
1	大変プラス	18	42%
2	ややプラス	15	35%
3	特に影響なし	6	14%
4	ややマイナス	3	7%
5	かなりマイナス	1	2%

⑵ 単位認定を受けた後に，51%の学生は自主的な英語学習を継続した．しかし，回答した医学部生の 66%は何も英語学習はしなかったと回答した．

⑶ 受講免除で生じた時間を活用できたと 79%が回答した．しかし，主に「専門科目の学習」や「休憩・睡眠・趣味」に過ごされていた(表 2)．英語力向上と直接関係のない形での時間の活用がほとんどで，英語教育関係者側にとっては，極めて残念な結果であった．

表 2 受講免除によって空いた時間の活用内容（複数回答可）

		人数
1	専門科目の学習など	26
2	休憩・睡眠	25
3	趣味	14
4	英語の学習・練習など	10
5	雑用	9
6	就職対策・卒業研究の準備など	2
7	自動車学校	2
8	留学準備	1

⑷ 上級レベルの授業履修について，33%があれば「希望した」と回答した．希望する科目としては,「英会話，ディベート，アカデミック・ライティング」などが多く，表現能力の向上を望んでいる学生が多かった．

⑸ 一部の学生は，認定された科目の代替科目がないことに不満を表明していた．単位認定によって履修免除するばかりではなく，より高い英語力を目指す者に対して，より高度な授業が提供されねばならない.単位取得の義務がない自由選択科目での高度な授業の提供も検討されるべきであろう．

⑹ G-TELP ライティング・テストの成績は，11 段階のうちの Level 6（中級の下）が 27.5%，Level 7（基礎の上）が 45%， Level 8(基礎）が 20%， Level 9（基礎の下）が 7.5% であった．タスクに対する受験者の自己評価は低く（表 3），タスク１か(T1)からタスク５(T5)までの自己評価のスコア間の相関も低かった（表 4）．

表 3　各タスクに対する自己評価

	T 1	T 2	T 3	T 4	T 5
AVG	1.83	2.18	1.83	1.88	1.73
SD	0.64	0.64	0.64	0.56	0.68
最小	1	1	1	1	1
最大	3	3	3	3	4

表 4　タスクの自己評価スコア間の相関

	T 1	T 2	T 3	T 4	T 5
T 1	1				
T 2	0.39	1.00			
T 3	0.24	0.33	1.00		
T 4	0.51	0.21	0.22	1.00	
T 5	0.36	0.23	0.42	0.58	1.00

ライティング・テストの受験経験不足，練習不足，キーボード入力の不慣れなどから達成感が得られていないようだったが，ライティング・テスト受験の有用性，妥当性を認めるコメントが多く見られた.

(7) 直接テストで測定された表現能力(発表語彙と表現文法）と間接テストで測定された英語力(受容語彙と読解力など）との間の相関は非常に低かった. G-TELP ライティング・テストで得られた発表語彙のスコアと語彙サイズ判定テストのスコアとの相関係数は，0.27 で，表現文法のスコアと語彙サイズ判定テストのスコアとの相関係数は，0.06 であった(表 5). TOEIC Bridge®テストの聴解セクションのスコアと発表語彙との相関は，0.01 で，表現文法との相関は.019 であった.読解セクションと表現文法の相関は 0.36，発表語彙との相関は 0.29 であった(表 6).

表 5 発表語彙，表現文法と語彙サイズ間の相関係数

	語彙サイズ	表現文法	発表語彙
語彙サイズ	1		
表現文法	0.06	1	
発表語彙	0.27	0.87	1

表 6 発表語彙，表現文法と TOEIC Bridge® テスト間の相関係数

	聴解	読解	表現文法	発表語彙
聴解	1.00			
読解	0.70	1.00		
表現文法	0.19	0.36	1.00	
発表語彙	0.01	0.29	0.87	1.00

(8) 外部テストで測定されていない能力（会話能力など）までも認定してしまい，すべての学生に提供されている英語母語話者による会話クラスなどの受講機会を奪ってしまっていた. 指導目標と一致していない内容の外部テストを利用して単位認定をしてきたことに対して，学生から大きな不満が出ている訳ではなかったが，学生にとって不利益であったことには違いない.

(9) 外部テストによる単位認定は，高等教育機関での英語教育の存在価値に大きな影響を及ぼしかねないことは予見できたことであるが，「高校までの学習で得た知識によって，大学の講義を受けなくてすむ制度」へ疑問を投げかけた学生が 1 名ではあったが存在した事実は，大学英語教育関係者は反省すべきことであろう. 外部試験の単位認定の実施

については，妥当性，波及効果がともに高い状況での利用のみに制限する方向で早急に見直しが必要である．

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計１件）

① 島谷浩，英語外部テストを利用した単位認定の妥当性と波及効果，熊本大学教育学部紀要，査読無，62 号，2013，81-90

〔学会発表〕（計２件）

② 島谷浩（2013 年 6 月 8 日）.「オンライン英語ライティングテストにおける大学生の表現能力と英語力」LET 九州・沖縄支部第 43 回研究大会．西南学院大学．

③ 島谷浩（2012 年 10 月 27 日）.「英語外部テストを利用した単位認定の波及効果：英語履修免除学生の英語学習状況と満足度」日本言語テスト学会第 16 回全国研究大会．専修大学生田キャンパス．

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

○取得状況（計０件）

〔その他〕
なし

６．研究組織

(1) 研究代表者
島谷　浩（SHIMATANI, Hiroshi）
熊本大学・教育学部・教授
研究者番号：１０２５８３３７

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし